

戦後 70 年の「敗戦の日」

今日 8 月 15 日は「終戦の日」であり、15 年におよぶ無謀な侵略戦争「敗戦の日」だ。書きたいことは多いが、朝日新聞 8 月 13 日 1 面「路傍の墓 母の抵抗」から、戦後 70 年目の「敗戦の日」を考えてみたい。

岩手県北上市の県道脇にたたずむ墓がある。建てられて今年で 60 年になる。ニューギニアで戦死した一人息子のために、母親が日雇いをしながら 10 年かけてためたお金で建てた。

母は、旧藤根村（北上市）の高橋セキ。若くして夫と死別し、一人で息子の千三を育てた。セキは 75 歳で亡くなる 1 年半前、路傍に墓を建てた理由を語っていた。〈オレ死んだらば、戦死した千三のごと、だれも忘れてしまうベェ。戦争のごとも忘れてしまうべなス。オレ、忘れてほしぐねえのス〉社会が忘却することへの母の静かな抵抗だった。

6 月末、岩手県奥州市で、地元の市民劇団「Z の風」が、親子を描いた公演「千三の墓」を上演した。〈取り消せ。赤紙、取り消せ〉戦争はおらが起こしたんでねえぞ。起こした奴が鉄砲担げばいいんだ〉千三に赤紙が届き、戦地に送られることになったある夜。野良着を着た母、セキが村長室に怒鳴り込む。脚本を書いたのは、岩手放送相談役の阿部正樹（72）。わが子を奪った国家の理不尽さに怒りをぶつける「肝っ玉母さん」としてセキを描いた。「根源的な怒りを抱きながらも、表に出せずにいた東北の母たちの本音を伝えたかった」

実際に怒鳴り込んだわけではない。当時は国家主義が社会を覆い、異議申し立ては許されぬ時代だった。時を経ていま、安全保障関連法案をめぐって、若者や母親が、街頭で国会前で、声を上げる。国家と対峙する舞台のセキを客席から見ながら、詩人の小原麗子（80）は思った。「セキさんが戦後 70 年に生まれ変わった」

千三は 42 年、東北出身者が多く、「雪部隊」と呼ばれた陸軍の第 36 師団に入隊。44 年 1 月、戦局が悪化する南方戦線に転進した。密林と湿地帯の中で多くの兵士が飢えとマラリヤで死んだ。千三もこの年の 11 月 4 日に戦病死した。23 歳。



取材後記から一戦死した千三の母高橋セキは、村長にこう語ったと伝えられている。「兵隊にやりたくねえど思っても、天皇陛下の命令だればしかだねエス。生まれた時から、オレの子どもでながったのス」

国家の論理と個人の心情のはざままで苦しむセキ。しかし、長く続いた平和の下で、どの町や村にもセキのような母親がいたということが忘れられつつあると感じる。「忘れるな」。セキのメッセージは明確だ。無謀な戦争はなぜ起きたのか。国内外に何をもちたのか。記憶し、記録する。そして問い続けることが戦後世代の責任ではないか。

(2015年8月15日)